

# 米欧亜回覧

第48号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集 総務部会

「評伝・久米邦武」を書き終えて・・・  
十一月の全体例会で、高田誠二氏が講演！

北海道大学の名誉教授で久米美術館の参事・研究員でもある高田誠二氏が、このたびミネルヴァ書房から久米邦武の評伝を上梓される。高田氏は科学技術史が専門だが、北海道大学で田中彰氏と共に「岩倉使節団」の研究に携わり、「『米欧回覧実記』の学際的研究」にまとめられたことはご承知の通りである。また、朝日選書に「維新の科学精神―『米欧回覧実記』の見聞した産業技術」という著書もある。



久米邦武



大正15年(88歳) 明治6年  
(『久米博士九十年回顧録』)

十一月十八日(日)の全体例会では、その高田氏に「久米邦武の評伝を書き終えて」というタイトルで講演をいただくことになった。長年の調査・研究の成果をご披露くださることになる、多くの人の参加を期待している。

### 七月の全体例会、盛況！

七月の全体例会は十四日に国際文化会館の講堂で行われ、会務報告があったあと、保阪正康氏の講演があった。

「今、昭和史の失敗から何を学ぶか」の講演は極めて密度の高いもので、聴衆は熱心に聞き入り、質疑も熱を帯びた。なお、二次会には講師を含む三十数名が参加して盛り上がった。

### グローバル・ジャパン

#### 研究会再開！

グローバルジャパン特別研究会は、この夏でワンクールを終了したが、これまでの成



全体例会(7月14日国際文化会館)

果を踏まえて来春よりセカンダリを再開したく、その準備会を十二月四日に開催することになった。狙いは「日本において、世界に発信できるものは何か」にあり、泉三郎氏の趣旨説明と提案を基に議論することになった。関心のある会員は是非参加されたい。

### 二〇〇八年の新年会はロシアがテーマ

本会の新年パーティは、毎年、岩倉使節団が訪れた国々を順番にテーマとして行っているが、二〇〇八年はロシアをテーマにすることに、幹事の藤原宣夫氏を中心に準備がすすめられている。現在の予定では一月下旬、場所はロシア大使館の公邸になる予定であり、ロシア色の濃いものになるものと期待される。

日本の近代史を語る場合、よくでる質問・意見がある。

七月の保阪正康氏の講演の際にもそれに類する質問が出た。あの愚かな戦争の失敗は誰が指導したのか、軍部か、陸軍か、天皇制か、それを辿っていくと結局、「明治憲法」にいきつき、さらに遡ると「岩倉使節団」にいたる。

この論理は戦後の失敗、バブル経済やモラルの退廃にも適用され、大蔵主導の財政や文部主導の教育に問題があり、つまりは官主導のシステムが元凶だとして、最後は明治初期の専制にたどりついでしまう。

### 「岩倉使節団」がいけなかった？

泉三郎

除があつたし、戦後には飢餓寸前の絶対的貧困があつた。だからこそ、明治期には懸命に富国強兵をはかり、戦後は軽武装経済重視でやってきた。それが見事に成功し独立と豊かな日本をつくりあげたのだから、これはこれで評価すべきが当然であろう。

問題はその後である。創業世代の苦勞も知らず、そのからくりも理解せず、先代の成功にあぐらをかいて驕り無為に過ごしたことにこそ失敗の原因がある。明治創業時の仕事にも戦後の体制にもむろん欠陥はつきものだ。それを修正し改造していくのが、後継世代の仕事であると思う。

そうなると、官僚制の確立者、大久保利通がワルだった、岩倉具視と伊藤博文がいけないといふことになり、その三人が参加した岩倉使節団がそもそもおかしいという議論になりかねない。

すればパラダイムの転換を図り、憲法でさえ改造しなくてはいけないのだ。祖父世代の建てた家になんたまま、設計がよくなかった、あちらが悪い、こちらが悪いと文句をいつているのでは、恩知らずのタワケといわれても致し方がない。不都合なら時代に合わせ状況に応じてさっさとカイゼンすべきなのではないか。

第44回 全体例会

保阪正康氏講演

いま、昭和史の失敗から何を学ぶか

七月の全体例会は、七月十四日午後十三時から国際文化会館講堂で開催された。会務報告および部会報告に続き、保阪正康氏の講演「今、昭和史の失敗から何を学ぶか」が行われた。以下は、その要旨である。

■講演要旨

◇失敗とは何か

失敗とは何か、それには失敗の基準をはっきりさせておく必要がある。それには三つの基準がある。

一・戦後民主主義という物差し

これは連合国側の価値観に根ざしている面があり、そこに限界もある

二・近代化という物差し

日本の近代化には特異性が



講演する保阪正康氏

あるので、それを勘案しなくてはならない。

三・個人的体験という物差し

私は昭和史の真実を知りたく、関係者から聞き取りを行った。実際に戦争に参加した人たちの生の声を聞いた。その個人的体験から抽出されたものも物差しにしたい。

さて、私は昭和史を調べるに際し、まず「東京裁判」に取り組もうと考えた。が、当時は、判事や検事がまだ生存していて、取材するには語学から始めなくてはならず無理だと思った。そこで代案として、東条英機を調べてみようと思いついた。まず東条を知るいろんな人に手紙を出してみた。そのリストは約二百名、意外に多くの人が会ってくれた。私に話すことで歴史として残るかも知れないと考えた節があった。

そしてわかったことは、左翼体験だけからみた見方は、無理がある、飛躍がある、現実には即してないということだ。そして戦争の底流には西洋近代に対する攘夷の気持ちがある。部構造にあることを感じ取った。

◇三つの視点

さて、本題の歴史における失敗だが、それを捉えるには三つの視点があると思う。

一・近代化という視点。

二・天皇制の視点。

三・村落共同体、下部構造からの視点である。

国力からして失敗が目に見えるのに、なぜあんな大國のアメリカと戦争をしたのか。また、戦争をいつ終わらせるかも明確でなく、やみくもに戦争にのめりこんでいったのは何故か。その背景にあるのは、日本の近代化の特異性にあると思う。

近代化には三つのタイプがある。ブルジョア革命(フランスやイギリス、米国)、上からの革命(ドイツ、日本)、共産革命の三つだが、日本はまさに上からの革命の典型である。明治維新以降の近代化、それは国家主導であり、結果的に軍事主導体制につながっていった。そして天皇の名において、上から下へ強圧的に押しつけていった。

具体的にはそれには二つの手段があり、戦時においては恫喝と甘言だった。

そこで当時、天皇はどんな気持ちだったのかを知ることが、付度する方法は三つある。

ひとつは御製、公表されているものは八百首ある。それ

を分析していくと、戦争への申し訳ない気持ちがよく現れている。二番目は側近たちの回想録で、木戸日記、入江日記など天皇は相手によって言葉を使い分けている。第三は記者会見でのお言葉である。

◇政策決定集団の責任

そのなかでたとえば、原爆について「戦時下だからやむをえない」といつている。が、実際には責任にかかわるようなことは触れていない。その意味で天皇は最大の政治家であったと思う。

問題

問題は軍部を主体とする政策決定集団だが、いかに主体性がなかったかということがわかる。というのは開戦の理由について、「私たちは平和を望んでいるのに、アメリカは拒絶し、中国は耳をかさない。だからやむをえず、戦争するのだ」という姿勢。あくまでも受け身で、意図が妨害されたからやる、我慢に我慢をしたがやむをえずやる。戦争責任はうやむや、相手の責任にしている。昭和十六年六月に独ソ戦が始まって、どうするか。結局、南進論がとられる。南の石油をおさえてもアメリカは何もしないだろうという甘い考えでやっていく。見通しがいかにもおかし

また、戦の大義名分がはっきりしてない。西洋列強の帝

国主義によるアジア支配に對抗して歴史的使命として戦うのだと宣言していれば、なんとか説明がたったのに、それもしてない。現実には初戦の勝利で東洋の国々を解放した。でもそれはその瞬間だけで、その後は西洋列強に代わって自らが帝国主義的支配を行った。

それは政策決定集団に、歴史的使命感、理念、思想がなかったからだ。行き当たりばったりの、目先の利害で決めていた。そこに大きな問題がある。

当時の日本にはそれほど人材はいなかったのかといえ、事態のわかっている人材も数多くいた。視野の広い、理念をもった人もいた。たとえば陸士の十九期に入った人材たち、その年は一般中学からのみ募集していたのだ。それが幼年学校から入ってくる連中と違う資質をもっていた。たとえば本間雅晴、今村均はそうした人たちだった。しかし、そういう人材はいずれも軍の中核から排除されていった。最後は、東条の息のかかったものだけになってしま

それまでは天皇機関説が生きていたのだが、それを払拭し崩壊せしめたのは東条である。東条は天皇を神格化し絶対化していく。そして政府大



講演に聞き入る参加者

本営連絡会議は二十人足らずの要人で構成されるが、重要事項はすべてそこで決定している。その言い分が「事ここいたって、志に反して、開戦する」というだけで、なんの理念もなく、思想もなく戦争を始めてしまう。当時の指導者には、まったく経綸がない。

東条は「戦争は負けたと思った時が負けなのだ」という考えだ。だから負けたといわないかぎり主体的には負けていない、実際の軍事では二年くらいしか戦っていない。あとは精神だけで戦っている。大本営発表というのを八百四十六回行っているが、実際に戦況がよかったのはそのうちわずかの期間だ。その後だんだんウソをつくようになっていく。昭和十九年にはウソもつけなくなってきた。その結果、大本営発表は極端に少なくなっている。

そのころ天皇には情報がはいらなくなっている。軍事指導者は都合のいいときだけ報告し、都合のよくないことはいつてない。その間、天皇は実は短波を聞いていた、英語の出来る侍従を通じて情報を得ていた。

◇天皇制と攘夷の精神

明治がつくってきた天皇制システムは明治人の個人的能力に依存していた。しかし昭和という時代には組織が担っている。が、もうそれは機能しなくなっており、やがて解体してしまう。終戦工作にしても日露戦争の時は伊藤博文が開戦と同時に金子堅太郎を米国に派遣して、米の世論を味方につけるように努力し、あわせて終戦工作も始めている。ところが太平洋戦争の場合、やみくもに戦うだけで、どう終結するか考えてない。

それにしても戦争に対し何故あれだけのエネルギーが全国に漲っていったのかは興味ある問題だ。それは攘夷の情念が国民的であったからではないか。開国以来、攘夷のエネルギーがたまっていた、西洋化に納得していない心情、日本文化となじまない西洋化に違和感があったそれが戦争を支えたのではないか。

近代化とは資本主義のもつ効率的な経済システムや政治的には民主化すること、権利

を保証するシステムをつくることだったであろう。が、それが村落共同体や情念的な社会空間では無理があった。西洋的システムに納得してない、文化がなじまないと国民は思っていた、つまり近代の仕組みの中でそうした不満が大衆の中で反発のエネルギーとなっていたのではないか。

そうした近代化を八十年くらいでやろうとしたところで無理があった。その意味では失敗というより通過儀礼と言わなければならない。

■いくつかの質問と応答から...

Q 昭和史の失敗の原因は結局、明治維新や岩倉使節団にまで遡るのではないか...

A 失敗の原因を明治維新までさかのぼると、実質的に答えは簡単だが、いちがいにそうはいえないと思う。どうやら大正時代に分岐点があったはずだ。第一次大戦後、国際的にも平和的ムードが盛り上がり、軍事が人気を失った時代がある。日本でも軍人のなり手が少なくなかった。しかし、日本の指導者はそのことをきちんと理解できなかった。そのころ「軍人は戦わないことが幸せだ」といい、「戦わないために存在する」とまで発言する軍人もいたほどだ。軍思想も変わった、そのときに日本は近代化の矛盾を精算

するチャンスだった。大正デモクラシーの高まりもあり、明治システムの欠陥を修正すべき時があった。それに気づいていたのは原敬だった。しかし残念ながら精算できずに終わった。大正時代に替えるべき時に替えられなかったことに問題があるのではないか。

Q 陸軍のことはわかったが、海軍はどうだったのか、海軍の責任は?

A 海軍については、戦後免罪とするような指摘がいくつかあった。海軍びいきの作家がいて好意的に書いたこともある。昭和二十年十一月には海軍の将官たちが集まって、この戦争をどう総括したらいいか議論もしている。これは陸軍の戦争だったと総括している。真珠湾も山本がやったけれど、国策にしたがってやったという、嶋田海軍大臣が陸軍に懐柔されてしまったともいっている。海軍は開戦に反対していたが、陸軍に強引に押し切られたためにやむを得ず戦ったのだと、たくみに責任逃れをしている。

海軍にもむろん責任はある。しかし、陸軍に多くの責任があるといえる。たとえば、阿南は「米内を斬れ」ということをいっている。終戦に至る段階の最高戦争指導会議で、米内は優柔不断だった

し、卑怯なところがあるというのだ。だが本土決戦を主張する陸軍の側に無理があったことは間違いない。太平洋戦争の前、これからの戦争では二十六の条件が揃っていないと戦えないという説があり、日本はそのほとんどが揃っていないとの説があった。ところが陸軍は精神力でカバーできるといって、精神論で片付けようとする。海軍は情念で動かないところがあつた。海軍は組織で動く巧妙さがあつてうまくいい逃れているともいえる。

Q 戦争責任は組織や体制にもあり、東条個人に負わせるのは酷という説もあるがどうか。

A 東条は軍人としても卑怯だし、自殺未遂についてもブザマだった。天皇の臣としてはどんな屈辱にあつても死んではいけないのに、ピストルで自殺をはかった。天皇への忠誠か、個人のプライドかという選択に、個人のプライドをとったことになる。本来なら日本刀で完全に死ななければならぬのに。そこに性根の弱さが露見している。明治指導者のもつていた覚悟、死を想定しながら仕事をした姿とは異質なものがある。東条人事などを見るとその責任は大きいと私は思う。

(文責泉三郎)

# グローバル・ジャパン特別研究会の一年 世界の中の日本人の役割― 西洋的近代化を超える思想を求めて

産業革命以降の世界は英米に主導されるアングロサクソン文明のグローバルな展開と理解できるが、それは技術や経済にとどまらず、合理主義や個人主義など思想の面でも極めて大きな影響をおよぼしてきた。とりわけ第二次大戦後の世界はアメリカングローバルイゼーションともいえるべき大波が新しい情報技術によって全世界をおおいつつある。そして、日本と日本人は、その大波にのみこまれつつあり、日本人のアイデンティティは危機に瀕しつつあるといえる。

この一年、議論は左記のような展開を辿っているが、問題が大きく、深く、まだ途上であり、引き続き研究を継続するつもりである。

一・岩倉使節団の西洋文明理解(和魂洋才)  
洋才…科学技術、産業貿易、自主独立、議会政治、法治国家  
洋魂…キリスト教、個人主義、快樂追求、利益主義

二・日本の近代化  
洋才の摂取…西洋化、近代化、西洋文明の摂取  
和魂の確保…日本独自の路線、宗教道徳、家族制度、天皇制国家と教育勅語

三・近代日本百三十年の総括「富国・強兵」の成功と失敗の歴史  
戦前期…強兵の果てに…帝国主義の摂取と破綻 敗戦、亡国の危機  
戦後期…富国の果てに…拝金主義と道徳の退廃、人間失格

四・世界における近代日本の特長

非西洋で唯一近代西洋化をいち早く成し遂げた国  
日本の文化と伝統の維持、日本語と文学、日本の経営など  
経済の繁栄と伝統的倫理の共存から崩壊へ  
五・世界における日本人の役割  
西洋的な知恵と東洋的な知恵の融合を目指す  
全的生活、精神と物質の双

六・西洋的近代を越える思想  
多元的、共存的、循環的、生物史観、克天思想から順天思想へ  
非貨幣的価値の認識、質、愛、幸福、信頼、無形の価値  
研究会代表 泉三郎

ボンド大学ペーター・パンツァー氏から当会に寄贈  
明治初期の日本・ドイツ外交官  
アイゼンデッヒャー公使の写真帖より」  
(ペーター・パンツァー&スヴェン・サーラ)

一八七五年から駐日弁理公使、一八八〇年から特命全権公使を務め、一八八二年まで東京に滞在した、カール・フォン・アイゼンデッヒャーが、日本での任務期間中に収集し、その後、ドイツに持ち帰った三冊の写真帖などの史料がボンド大学日本文化研究所に所蔵されている。

この、あまり知られていない外交官が、日本で出会った人物の肖像写真、日本の風景など、彼が収集・整理した写真が収められた写真帖を中心にしてドイツ語と日本語併記の出版物「明治初期の日本・ドイツ外交官アイゼンデッヒャー公使の写真帖より」としてまとめられ、一冊が、監修者の一人であり、二〇〇一年の国際シンポジウムや「米欧回覧実記ドイツ語版」で当会と馴染みの深い、ボンド大学のペーター・パンツァー教授から寄贈された。

アルバムには総計五十四枚の日本人男女の肖像写真が収められているが、使節団と関連が深い人物は第五章「外交官と接待係―日本の新たな指導者達」として登場している。使節団のメンバーであった岩倉具視、伊藤博文、山田顕義とともに外国で撮影された田中須磨(田中不二磨の妻)肖像写真などが掲載されている。

方がトータルに満たされる社会  
地球的スケールで通用する普遍的な思想の創造へ  
六・西洋的近代を越える思想

掲載されている肖像写真の一部(右は表紙)



Peter Pantzer & Sven Saaler  
ペーター・パンツァー & スヴェン・サーラ  
Japanische Impressionen eines Kaiserlichen Gesandten.  
Karl von Eisendecher im Japan der Meiji-Zeit  
明治初期の日本  
ドイツ外交官アイゼンデッヒャー公使の写真帖より



田中須磨



山田顕義



伊藤博文



岩倉具視

# ゲスト 藤井裕久元大蔵大臣 現未来部会 政治家に聞く

第四十六号で既報のとおり、三月二十八日、現未来部会で、元大蔵大臣の藤井裕久氏の話を聞く機会があった。今号ではそれを要約して紹介する。

藤井氏は、民主党系シンクタンクの公共政策プラントホームの理事長であり。二〇〇五年から民主党の日本の近現代史調査会の座長を務め、「歴史をつくるもの」日本の近現代史述講」(中央公論新社)を監修している。

## ◇米欧亜回覧について

平成五年、選挙の年に「米欧回覧百二十年の旅」(泉三郎)を読んだ。選挙は余り好きではないので、夜になると本を読んでいた。

## ◇歴史に興味をもった経緯

昭和十九年、小学校六年のときに東京都小平市へ学童疎開をした。七月にサイパンが



現未来部会で話をする元大蔵大臣の藤井裕久氏

落ち、十月か十一月にB二十九が大挙して爆撃にきた。そのとき、日本の戦闘機がB二十九に完全な体当たりをし、真二つになって私の直ぐ傍に落ちた。日本の戦闘機からパイロットが飛び降りたがパラシュートに火が着いていた、あくる日の新聞には、「小平上空において丹下少尉散華、二階級特進」と出ていた。また、焼夷弾がグルグル回りながら落ちてきて私の隣の部屋が焼け、仲間が死んだ。何故、悲惨な戦争をしてしまったのかということに勉強しなくては、死んだ友達に申し訳ないと思った。今、A級戦犯とか靖国と言っているが、その根底にある歴史観をどう考えるかということの方が大事である。

## ◇戦争責任

戦争責任者が祀られていることを承知しているが、靖国神社へは行く。特攻隊や栗林さんも戦争犠牲者だと思っていて、その背後に居る一部の軍国主義者が悪いという考えである。A級戦犯は事後法であることは間違いないし、平和によるものに対する罪などというのもあるわけではない。しかし、日本の歴史を学

べば、ほとんどが罪なき三百万人以上の人を殺しているの、やはりこの国をダメにした人間がいて日本国および日本国民に責任を負わなければいけない人が居るということが前提である。渡邊恒雄氏の「検証戦争責任」も基本認識は全く同じだ。

## ◇勉強会について

今の若い者は、議員も含めて何も知らない。だから一生懸命勉強させている。大学のゼミナール方式で、教授に二、三回講義してもらってディスカッションしている。勉強会の前提は三つある。

第一は、最初は明治からはじめること。本当に日本が悪いことをやったのは昭和だが、明治の政治思想が日本を間違った方向にもって行っているのは間違いない。明治から始めて岸信介まで、その理由は簡単で、次の池田勇人は戦後っ子である。

二番目は、偏狭なナショナリズムとマルクスの歴史観の排除。中国やアジアを学ぶときには二千年の歴史をもつと知らなければいけない。漢字は中国から貰った、根っこはやはり中国にあることだけは知っておくように言っている。自分は純粋の日本人と言っている者がいるが、変てこな国粹主義者を作らないために客観的な事実を言っている。

る。

三番目は、失敗を素直に認める歴史観を持つこと。戦争末期アメリカの国務省の中核人物のジョージ・ケナンは、失敗を認めるアメリカの代表的な人物である。日本から賠償を取ったらヒットラーみたいなのが出てくるとちゃんと言っている。昭和二十二年にマーシャルプランというのがありますが、実はジョージ・ケナンが考えたことである。

次に、勉強会で必ず取り上げる三つの視点がある。一つは、政治思想。昭和からの政治思想はあまり無く、昭和からの政治思想が日本の昭和からの誤りに影響している。

二番目は、絶対君主の下にあるはずがない政党が、何故できたのかという問題。天皇機関説ばかりが有名だが、美濃部達吉が、明治憲法を作った人の意図に反して日本の戦前が運営された面がある。

三番目に経済。経済がしっかりしていないと世の中が悪くなることは間違いない。大不況や貧富の格差、これが世の中を悪くする。藤井氏は続いて、偏狭なナショナリズムに結びついた国家神道やいくつかの思想、政党と経済について、外交の過誤などについて詳しく述べた。

## ■使節団関連公文書の話■

### ①岩倉使節団の勅旨みつかる

岩倉具視に、明治天皇があれとみられる勅旨がこのほど見つかると、記事が共同通信から各新聞社に配信された。書かれていた内容は国立公文書館所蔵の「大使全書」などにも記載されているが、勅旨の形式を知る上で貴重な資料になるという。添付されていた伝来書によれば、「使節団の一等書記官田辺太一から娘婿の三宅雪嶺を経て、評論家の木村毅の元で二十数年前まで保管されていたとみられる。

当会代表の泉三郎氏は取材に応じて、「この勅旨が世界を旅したのかもしれないと思う」と感慨深い。田辺は書記官長の役どころで岩倉についていたので、勅旨を持っているように言われた可能性もある」と話している。

### ②インターネット特別展

四十号で紹介した、国立公文書館が運営するアジア歴史資料センター(アジア歴)の岩倉使節団に関する特別展、「公文書に見る岩倉使節団の知識ヲ世界ニ求メ」が現在も閲覧できる。

主な内容は、「使節団とは」、「主要人物紹介」、「用語集」と「参考文献」の四つのページで構成されている。



実記を読む会 (第109回)

### 実記を読む会報告

連絡 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



#### ■第百九回

七月十二日、出席者十四名。第六十二巻「露国鉄道及ヒ聖彼堡府ノ総説」を小林氏が報告。

ペテルブルグ間総行程千六百km、四十五時間。久米は二日にわたる殺風景な長丁場に感極まり(一)、タイトルに「露国鉄道」を冠したに相違ない。

用意された資料は、十五頁にわたる「三十日」一日分を八項目に分け、夫々簡にして要を得た記述で実に分かり易い。酷い鉄道旅の果て、ペテルブルグ駅に着いた途端、「只此一府ハ、華嚴樓閣ヲ起シテ、一大雄都ヲナシタリ、此国ノ生意ハ他ノ諸国ニ相異

ナルヲ察スルニタルヘシ」と、久米は一転刮目する。

実はこの頃ロシアは「多クハ貨物ノ運送ヲ目的ニ」猛烈な勢いで鉄道建設を進めていた。クリミア戦争の敗北は、鉄道網の不備が物資、兵員輸送の致命的障害となったという史実がある。久米一行の体験も分かる気がする。また、「ロシアは貴族のみが富を独占し庶民は貧しく抑圧され、ために貿易は振るわず利権は外国人に独占される。ペテルブルグの大きな商店はすべてドイツ人で独占」とある。後発貴族・農奴国家ロシアの、あれもこれもチグハグな姿が目につく。

#### ■第百十回

九月十三日、出席者十四名。第六十四巻「サント・ペテルブルグ市の記・中」を堀江氏が報告

一八七三年四月七日(月)使節団一行は午後外務省で外交交渉の後、紙幣印刷局を訪問。「露国紙幣療ノ広大ナル事、各国ニ比類ナシ」。用意された資料(図頁六枚、写真十八葉、地図三枚、市街図、建築物案内図、市及び郊外図)を駆使。「百聞は一見にしかず」の境地に誘導される感あり。すでに三回の報告で「既視感」のあるサント・ペテルブルグ市・街・建物、ここに来て本当に見

てきたような気分にはせられない。

さて久米は紙幣寮見学のくだりで「紙幣ヲ発行スルニ定限ナク、人民ノ信用ヲ失ヒシハ、欧州列国中ニ露西亜国ヲ最ナリトス、一として、大露西亜の財政の脆弱さに触れている。不換紙幣の増刷で財政ヤリクリを続けてきた実態を見た使節団は、露国通貨問題の重大さに気付いていたに違いない。

次に図書館に行く。世に名高い大図書館で、当時蔵書百万冊(当今三千三百万冊!)とされる。帰り道、運河の岸沿いの長い建物の前に「多人群リ立ヲミル、之ヲ問ヘハ曰ク、是ハ奴ヲ売買スル所ナリ、廃奴ノ後十年以來ハ、其唱ヘテ、改メテ、人ヲ借スト言トナン、一「奴隷」を「雇い人」と呼びかえた!

四月八日、二十五キロほど郊外にあるコルビノの製鉄所(軍艦の材料製造を専門)を訪れた。「露国政府、海軍ニ力ヲ用ヒ、戦艦ノ製造ニ心ヲ苦ムルハ、彼得大帝ヨリノ遺業ニ因リ、欧州ニ於テモ、只英仏ノ両大国ノミ、之ニ超駕スヘキ勢力アルヘシ、一とし、当時クロンシュタットで建艦中の装甲艦は、英国のそれと並んで世界海軍の覇者と呼ばれ、しかもこれはアメリカ人が発明したもの、と「実



サント・ペテルブルグ運河の岸 (『実記』より)

記」は記している。

四月九日、皇太子アレクサンドル大公に謁見、あと「育嬰院(乳幼児養護施設)」へ。本項は「育嬰院」の記述に関する当会会員坂内知子氏の「研究論文」を大久保氏が担当。①「回覧実記」記述の構成、②他国の「育嬰院」の様子、の二項目に分け、手際よく解説された。

このあと、堀江さんは(第二部)「ピョートル大帝の生涯」、その主要事業を概説、特に大帝二十五〜二十六歳の折、二百五十人の使節団を編成、その先頭に立って十八ヶ月にわたりペテルリン、アムステルダム、ロンドン、ウィーンを視察・修得派遣した詳細を熱弁、さらに(第三部)「サント・ペテルブルグの都市建設」に説き及び、この分野の専門家堀江さんの面目躍如。

(文責) 桑名正行  
(写真) 橋本吉信

### 英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

y-iwasaki@isr.or.jp



#### ■第五十回

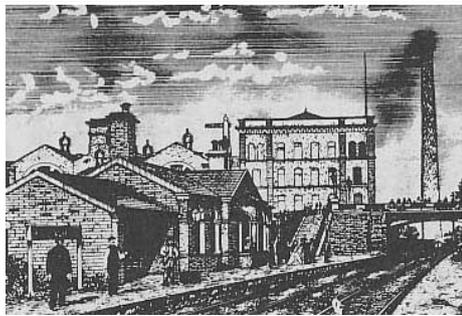
六月二十一日、九名参加。第二巻英国編の第三十章「ニューカッスル市の記」の続きを読む。

永島氏がタイン川の浚渫や鉛工場見学部分を報告。「西洋工芸の盛んなるは分業の多きにあり」との久米の記述には、「功罪両方ある」と議論賑やかだった。斎藤氏はソーダ工場、貿易港、難船救助、天文台等見学部分を報告。久米が「ブアレース」と表現したのが実はballastだったとわかり全員納得。

#### ■第五十一回

七月二十六日、八名参加。第三十四章「ニューカッスル市の記」の続き、及び「第三十五章ブラッドフォード市の記」を読む。

二原氏が、BradfordのSaltareにあるアルパカ毛織工場訪問部分を報告。設立者Salt氏が建てた建物が図書館、コンサートホール、ラボを含む立派なもので、二〇〇一年には世界遺産に指定された。又、Saltareには水道、銭湯、病院、学校はおろ



フラットホール・アルパカ製場  
(『実記』より)

か、退職者用の養老院まで併設されていた由にて、日本の高齢化問題に明治の海外視察成果がどのくらい生かされたのかと一同慨嘆。

久保田氏が、Bradford南郊のManningham (久米の記録ミットラントは誤りか)の絹織物工場見学部分を報告。養蚕から始まって、製糸、撚糸、機織、染色に至る工程について、絹織物に詳しい久保田氏ならではの入念な解説。

■第五十二回  
九月二十日、六名参加。第三十五章ブラッドフォード市の記の続きを読む。

久保田氏が前回に続いてManninghamの絹織物工場で、日本や中国から輸入された屑繭を「細美な糸」にする工程を、三種の機械のメカニズムを解き明かしながら説明。

小林氏がHalifaxの羊毛紡織

工場見学部分から、絨毯・ピロード類の「百般の紋」を織りなす工程などを報告。

繊維から糸に、糸から布にする過程を、記述の間違いや不十分さを補って、ヴィヴィッドに再現していただいたが、久米がああ時代にここまで具体的に記述しようとした意気込みにはつくづく頭が下がる。その影響か、この日の読書会は、少人数なのに普段以上に侃々諤々だった。

(文責) 岩崎洋三

### 青年部会報告 連絡 山本 陽子



mase@yhb.att.ne.jp

■六月例会  
六月七日、当会会員であり、日本貿易振興機構(JETRO)副理事長、塚本弘氏に『グローバル化の拡大と日本の将来』という演題で講演をいただいた。日本の海外戦略はどのように描かれているのか、また何を求められているのかを最近の海外で行った講演資料を基にお話をいただいた。岩倉具視が日本を發つまでは鬚を結っていたがシカゴではもう完全に洋式になっていくことを例に挙げ、「Japan Cool」の魅力は西洋と東洋の文化の融合にあると説くなど、外からの目線

### 歴史部会報告 連絡 小野 博正



mi040031-9697@tba.t-

■八月三日  
テーマは、『ある小国のサクセスストーリー・ルクセンブルク大公国の場合』。人口四十五万、欧州の大國に囲まれた小國・ルクセンブルク大公

でビジネス・文化・教育などに話が及んだ。

■八月例会  
八月四日、当会会員であり、ワールド・パートナーシップフォーラム代表幹事、日本イスラエル商工会議所会頭、藤原宣夫氏に『戦争責任・核問題・中東問題』という演題で講演をいただいた。八月六日(広島への原爆投下)を前に、二度と戦争を繰り返してはならないという強いメッセージを体験をまじえてお話をいただいた。また、アメリカ建国時代に東海岸から多くの人が中東に拉致された事が中東問題の根源にあるということも聞き、問題の根の深さを改めて考えさせられた。懇親会を含め五時間と長時間お付き合ひいただき、大変充実した議論を行うことができた。

(文責) 和田本 聡

以下、主な論点を拾ってみる。

一、大公国は、ユーロの父と言われている。一九五〇年にフランスのシヨマン外相(ルクセンブルク人)が提唱で、石炭・鉄鋼共同体を發足、これが事実上のユーロの原点となった。一九七〇年にピエール・ベルナール(ルクセンブルク首相)が、ユーロ結成を提案し、実現に精力的に動いた。今では、年三回のEU会議はルクセンブルクで開催されて

いる。兵士七百人しか持たない、一時、非武装中立宣言もしたことがある小國が、同列強の中で、独立を維持し、生き延びてきたのは列強を結びつける外交力(独仏和解も演出)にこそ秘密があった。

二、十九世紀には、欧州最貧國の一つであった同國が、世界一の一人当たりGDPを達成できたのは、良質の鉄鉱石の發見が転機となり、鉄鋼業が隆盛を極めたことにもよるが、その後は、欧州の金融のメッカとして發展、情報通信・觀光などのサービス産業にタイミングよくシフトした。今、サービス産業は八割を占め、經濟成長率四・五%を維持し、失業率は四・六%と欧州平均九%より低い。

三、公用語はフランス語、ドイツ語と母國語のルクセンブルク語。大學は近隣諸國を使うので、國民は國際化を必然的に経験している。人口の少ない同國は、ルクセンブルク人六割、ポルトガル人(タクシー運転手など)、イタリア人(銀製品加工)も多い、両國とは移民協定を結んで、一定数に押さえられている。現在、ボスニア人が一日三十人流入し、将来の波乱要因を含んでいる。元首はアンリ大公。日本の皇室とは深い關係を結んでいる。

(文責) 小野博正

(文責) 小野博正

特定非営利活動法人

## 「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。  
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。  
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。
- 会員** 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回くらい全体例会をもちます。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史、現未来、総務部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には準会員(年会費3,000円)の特典もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」(2007年7月17日より)  
〒170-6045 東京都豊島区東池袋3-1-1  
サンシャイン60 45階  
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp  
TEL:03-5979-2273 FAX:03-5979-2552
- 入会申込**  
入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。  
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。  
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

## ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等  
書籍・DVD案内も掲載

<http://www.iwakura-mission.jp>



## &lt;催し案内&gt;

2007年10月～12月の予定です

## ☆全体例会

- 日時：11月18日(日) 13:30～17:00  
一部 会務報告 13:30～14:30  
講演 14:45～17:00  
二部 懇親会 17:20～19:30  
\*高田先生も参加

講師：高田誠二氏

テーマ：「評伝久米邦武」について

場所：一部 国際文化会館講堂  
二部 華珍楼(鳥居坂下)

会費：2,000円(学生1,000円) 二部は 5,000円

## ☆実記を読む会

- 日時：11月8日(木) 18:30～21:00  
12月13日(木) 13:00～16:30  
\*忘年会を兼ね清澄庭園(涼亭)にて開催  
1月10日(木) 18:30～21:00

場所：国際文化会館

会費：1,000円

## ☆英訳実記を読む会

- 日時：11月15日(木) 18:30～21:00  
12月20日(木) 18:30～21:00

場所：財)統計研究会会議室

港区新橋1-18-16 日本生命ビル7階

会費：1,000円

## ☆現未来部会

- 日時：11月28日(水) 18:00～21:00

場所：国際文化会館

テーマ：

## ☆グローバルジャパン研究会

- 日時：12月4日(火) 18:00～21:00

場所：国際文化会館セミナールーム

テーマ：世界の中の日本の役割

## ☆関西支部例会

- 日時：10月20日(土)

場所：大阪弥生会館

## 編集後記

◇本来の発行日程に近づいたと前号で豪語しましたが、早くも今回、予定していた発行日が大幅に遅れる体たらくとなつてしまいました。早く原稿を執筆いただいた方々に申し訳ない気持ちで一杯です。また過日の案内などニュースの役割を果たせない箇所があり、お詫び申し上げます。一人ひとり都合が異なる時間がうまく合わないで作業が滞るといふ、ボランティア集団運営の難しさを痛感した次第です。

◇自宅パソコンのハードディスクが毀損し、パソコンのカバーを開けてディスクの交換、全てのソフトをインストーलという初めての経験をし、予期せぬ膨大な時間と手間を要しました。メールリングリストを管理していただいては楠木さんは二台同時にディスクが壊れたそうで、その大変さは容易に実感できます。

◇このニュースを始めとする個人的な作業とファイリングは、主に自宅のパソコンでしたので、ホームページの更新などにも影響がでてしまいます。遅ればせながら、定期的なバックアップを決意しています。後手後手になる習性がすべての原因と分かっているのですが。(N)